



# 巫女殺し

上司 小劍

其の年は、陽氣が後れてゐたと見えて、十月になつても、まだ帷子の欲しい日があつた。土用前後の曇り日のやうに蒸し暑くて、頭が重く焦と氣の狂ひさうな日もあつた。

「いつもなら、もう松茸がそろ／＼出る時分やのになア。」と、社司の桑原真弓は朝の供饌に來た序に、社務所を兼ねた神樂師の溜へ入つて、一服やりながら言つた。

『さいや、また松茸の時節になる。』と、神樂師の和三郎は、よれ／＼になつた蒨黄の直垂の襟を合はして、紐を結び直しつゝ言つた。くたく／＼になつた烏帽子は脱いで、傍の八足の上に載せてある。

巫女の春榮は、何を思ひ出してか、下を向いてくす／＼笑つてゐる。鼠色に

ふりかゝつた白衣はくえのところへ紋のやうに汚點しみのあるのを着て、緋の袴の色の褪せたのを穿いてゐる。  
 『春さん、何んぞ面白い話でも聴かしてんか。』と、眞弓は和三郎の鈍豆の煙管でまた一服吸ひ付けた。  
 菖蒲あやむぎの濃い烟が、禿頭かぶを銜はへた風折烏帽子かざりのぐるりへ舞ひ騰るので、丁ど頭から烟が出てゐるやうにも見える。この人の白い狩衣くしも皺しわくちやで、差貫さしぬきには夥おほしく泥はが撥ねあがつてゐる。煙管を下へ置くと、咽喉佛あごぼけの突き出てゐる萎しびた頸くびを折れさうに曲げて、二つ三つ咳せきをした。

『面白い話で、何んにもあれしまへんがな。』と春榮は突ツ立つたまゝ眞弓に答へて、坐まつてゐる和三郎の、色の黒いながらに何處どことなく品のある瓜實うり顔かほを見い／＼した。上り口に腰をかけてゐる眞弓は、暫くヂツと身動みぶきをしないで、皮かわの弛たるんだ臉かほを閉つぶぢて俯伏うつぶいてゐた。何も深い考へに沈しづむのではなく、時々かうするのが、この人の癖くせである。

『來きしなに浪花座なげざの前通まへどつて來きましたが、河内屋かんなの延若のぶわになる披露ひかりで、えらい人氣にんきや。』と、春榮は誰れにともなく言いつた。

『役者やくで、え、商賣しょうばいやなア。錢ぜにが仰山おほに貰もらへて、女子おんなには惚ほれられて、……わいも今度は役者やくに生なれ代しろはつて來きるかなア。』と、和三郎は眞弓が下へ置いた鈍豆どんずのまだ熱いのを取り上げ、袋ふくろごとの菖蒲あやむぎを摘とんで詰つめた。

『あんたが役者やくに生なれるんなら、わたくしへは藝妓げいこに生なれて來きる。……え、着物きものが着きられて、芝居あやぐが觀みられて、……』と、春榮は大きな聲こゑで言いつた。眞弓は俯伏うつぶいたまゝ坐ま睡ねでもしてゐるのか、鬢びんの白髮はくはつ一本動いっぴんどうかさうとはしない。

『あんたは藝妓げいこに生れ代らいでも、今かて役者やくしややないか。女優じゆうや、女優にょゆうや。神さんの女優じゆうや。』  
 『ほ、ほ、ほ。わたへが女優じゆうなら、あんたは囃はし方かたや。』 浪花座ななばざなら、竹村政次郎たけむらまさじろうちうとこや。』と、  
 春榮はるえは其の色白いろしろの圓まるい顔かほを白衣びやくいの袖そでで半分蔽おほふて言いつた。耳みみの後のちなど、白粉おしろいが斑あざに溜たまつて、何なにかに舐なめられた痕あとのやうに見みえる。

『役者やくしやでも囃はし方かたでも、神さん相手あひまでは始はじまらん。活いききた人間相手にんげんあひまでないとなア。』と 和三郎わさじろうは、七分しちぶんほどに伸びた其の縮れ毛ちぢみけの頭かぶを左ひだりの手てで撫なで廻まわはした。

『時候ときが温過ぬくぎるよつて、朝あさから眠ねたうなる。』と、真弓まゆみは不意ふいに立ち上あつて、朴ひらの木齒ぎのちびた利休りきよを引ひき摺ずり、一丁餘いちぢょうより距はつた本務ほんむの社やしろへ引ひき揚あげた。此處こゝの社やしろは兼務けんむで、朝あさの供饌くわんと夕ゆふの撤饌せつわんとだけに来きるのである。

『もつと勿體もったい付けて、社司しゃじなら社司しゃじらしいやうにしたらよさ、うなもんや。』と、春榮はるえは、門かどの方かたへ敷石しきいしを踏ふんで行く真弓まゆみの、狩衣かりぎぬの裾すその風かぜにひら／＼するのを見送みおくりつゝ言いつた。

『あないにして、五千圓ごせんげんは持つてるちうさかいな。月給げつぎやうは尠せううても、賽錢さいせんの部割ぶわりりや上ありもんで實入じつにりりが大おほい。……わいも今度役者いまどやくしやに生れ代ならんなら、神主かみぬしに生なれて来きうかなア。月給げつぎやう九圓くげんの神樂師かむらしはもう御免ごめんや。……こいでも神樂師かむらしちうと、長袖ながそでの部類ぶるいやがなア。』と、和三郎わさじろうの溜息ためいきとももに言いひ出すのを、春榮はるえは押し留おしどめめる風かぜにして、

『昔むかしのこと言いふたかてあけへん。……昔むかしの神樂師かむらしはえらいもんで、お父おとうつあんは金持かねもちちやつたが、自分おれは十二じふにの年としから苦勞くろうして、繼母けいぼに虐いぢめられ、散財さんざい一つ覺おぼえん中に火事かじで全燒ぜんやけになつて、……やろ、ちや

んと知つてる。」と、げたく笑つた。

『金山の坑夫までして來たのも残念やが、一番残念なのは、錢が無うて、三十越えるまで女知らなんだこつちや。……もうこれ四十に間のない年になつては、何をしたかて、頓と面白くない。』と、和三郎は額に深い皺を寄せて言つた。

『朝、むツくり起きからお神樂に引き出されて、風呂へ入つたりしたんで、今日は身體の工合がわるい。』と、春榮は引き摺るほど長く穿いた緋の袴の裾をからげて、赤い鼻緒の雪駄をちやらくと拜殿の方へ行つた。和三郎も手早く直垂を脱ぎ棄て、白木綿の單衣に淺黄の袴の平服姿になつた。

拜殿の前へは、若い商人風の男が參詣して、鈴の緒を引き、賽錢箱へ一錢銅貨を一つ投げ込むと、兩手を合はして、稍暫く祈念を凝らしてゐた。

## 二

今日は珍らしく早朝から御神樂を上げに來た人があつて、春榮も和三郎も出勤早々忙しい思ひをしたが、午前十時頃になると、朝のと同じほどの年輩で、ズット濼い身形をした堂島へでも行きさうな人が、それ者の果てとも思はるゝ垢抜けのした大年増を連れて來て、御神樂と献湯とを申し込んだ。

『春さん、も一遍電話や。』と、和三郎は參詣人夫婦を割り拜殿の西側に待たして置いて、春榮を促し立てた。春榮は大儀さうに身を起して、拜殿の前の敷石の上に雪駄の音を一際高くさして、横門から西の方へ出た。微風に陽炎のやうな軽い砂埃りを揚げてゐる往來には、紙片の散らばつたのや、馬の糞の乾いて碎けたのが、いらくと照り付ける日光に煌めいて、ごた混ぜになつた物のにほひが、ふんと鼻を

衝いた。門を出ると春榮は小走りに埃りを蹴立て、白衣の長い袂を袖屏風に、顔の日に焼けるのを防ぎつゝ、焼芋屋の前から北の方へ行つた。其の焼芋屋では二三日前に引き込ました氷屋の商賣道具をまた持ち出して、焼芋の傍に氷水も賣つてゐた。近在の百姓が曳いて来る肥料桶を載せた車や、青物を積んだ八百屋の車の間を縫ふやうにして、赤い根掛けを結んだ春榮の新蝶々の頭は、北へ北へと行つた。緞帳芝居の花道にでも見る風な白衣に緋の袴の姿は、このごたくと貧乏臭い町筋に、一種異様の色彩を添へた。道行く人は大抵振り返つて見送つた。

『おもしろい女やなア。』

『荒魂はんの巫女や。』

『一寸澁皮の剥けたげん、さいやないか。』

屋根葺きの足みたいなど、村の娘たちによく言はれるほど、思ひ切つて眞ッ黒く日に焼けた顔に、下ろし立ての新らしい手拭で揃へに鉢巻をして、同じやうな肥料車を曳きつゝ、この町から和泉の國へと歸つて行く三人の若い衆は、春榮の紅白染め分けの姿が、西側の砂糖屋の店に消えて行くまで、見返へりく、こんなことを言つた。

例によつて砂糖屋で電話を借りた春榮は、丁ど出た交換手が、自分の暫く電話局に勤めてゐた時、一番親しくしてゐた同じ年頃の娘であつたので、懐かしがつて三分間ほど互ひに近況を語り合つた末、

『わたしだといふことが、よく分つて。』

『あなただつて、よく分つて。』などと、電話だけでは、東京風の言葉を上手に使つてから、

『何うぞ南の△千△百△十番へ。』と、本家のやうにしてゐる四五丁距つた和魂神社（和魂神社）の社務所へ繋いで貰つて、横笛（わうてき）の左司馬はんと、ちやんぼんの徳さんと呼んだ。

春榮が電話を濟まして拜殿へ歸つて來ると、間もなく横笛の函（はう）を持つた左司馬爺さんと、ちやんぼんを風呂敷に包んだ徳さんが、萌黄の直垂姿で、

『今日はなか／＼忙しいなア。』と言ひ／＼やつて來た。其の間に和三郎もまた直垂を着け、三人並んで拜殿の東側の圓座の上へ坐り込んだ。

緋の袴を稍新らしいのに着け更へて、白の水干を纏ひ、五色の絹の垂れた神樂鈴を手にした春榮は、ガラ／＼鳴る鈴の音と／＼もに、割り拜殿の中央の土間（ちま）の荒薦（あらこも）の上へ下り立ち、神前に向つて一禮すると左司馬の横笛（わうてき）が先づピイと高調子で鳴り響き、次ぎに和三郎は、鰻の腹のやうに頬を膨らまして、筆築（ひちりき）を吹いた。笙と太鼓とは略して、徳さんの打ち鳴らす眞鍮のちやんぼんで調子を取つて、春榮は鈴を振りつゝ舞ふた。

舞ひながら時々筆築の方を偷み見する春榮の右の頬には、片髷が深く刻まれてゐた。徳さんはちやんぼんをやりながら、隣りから膝で和三郎の腰のあたりを小突いた。

『何時（いつ）かのお祝ひの時、御所車に赤い綱を付けて曳き出した宗右衛門の藝妓（げいぎ）たちの仕丁姿の中には、この春榮よりも醜いのがあつた。春榮があの中に混（まじ）ると、屹（ちか）と中（ちゆう）から上の部（ぶ）や。』などと思つて、和三郎は筆築を吹きながら、身の毛をぞく／＼させた。けれども、月が重（かさ）るに連れて膨れて來るお腹（はら）が、水干を着けた外へまで少しは目立つて來はせぬかと考へ出すと、唇（くは）が硬張（こば）つて筆築の舌も氷（こほ）り着くやうな氣が

した。自分の罪を犯した孕み女を神前に舞はしてゐるのが、急に空怖ろしくもなつて來た。斜に神前を見やると、階段の上に高く海老錠をおろした本殿の扉は、への字なりに閉ぢた巨人の口元の如くに思はれ、其の上に懸かつた八寸の神鏡は、自分の罪を寫し出す淨玻璃とも見られた。

筆筈の音律が亂れて來たので、左司馬も徳さんも不思議がつて和三郎の方を見た。和三郎は何糞ツと元氣を出して、十分の息で筆筈の音を、ララレラーと調へて來た。さうして、

『昨日まで電話交換手をしてゐた素人にも直き出来るこんな尿臭い舞を、神さんは喜んで見給ふのかなア。』と、毎ものやうに考へる餘裕すら出て來た。參詣人の男女二人は、拜殿の西側に畏まつて、この清淨な舞をば神の如何に納受ましますかを窺つてゐるらしかつた。

鈴の舞が終ると、今度は劍の舞に移る段取りとなつた。左司馬爺さんは更に別の函から細い横笛を取り出して、急調に吹き始めた。和三郎は筆筈の舌を取り代へて、横笛を追つかけた。八足の上へ鈴を置いた春榮は、神前に向つて再び一禮すると、別の八足の上から白鞘の短い太刀を取り上げ、それを捧げてまた恭しく拜禮した後、樂の音に合はせつゝ舞ひ、舞つては太刀を頂き、頂いてはまた舞ひ、到頭すらりと抜いて、蜘蛛の巣を拂ふやうな身振りをした。水干の袖も白衣の袖も共に捲れ上つて、白い腕が奥の方まで見えた。男女二人の參詣人は、いよゝゝひれ伏して頭を上げなかつた。

劍の舞を舞ひ納めた春榮は、水干を脱ぎ棄て、元の古びた緋の袴に穿き更へ、素足へ鼻緒に白紙を巻き付けた藁草履を突ツかけ、拜殿の前の砂の上へ下り立つた。東手に並んだ献湯釜には先刻から湯がたぎつて、青い笹の枝も二束置いてあつた。春榮は更に神前に向つて拜禮した上、其の笹の枝を兩手に持

ち、釜の湯に浸して目八分に押し戴くと、拜殿からはまた樂の音が緩く起つた。玉と沸きたつ熱湯の笹の葉を傳はるのを春榮は兩手に持つて、交る／＼振り立てた。湯の玉は白衣の肩から胸へ、雨のやうに撥ね飛んだ。

湯立てが濟むと、春榮はぐたりと疲れた風で、術無氣に社務所へ入つて、崩れるやうに腰をおろした。參詣人の男女二人は、漸く拜殿から下り、賽錢箱の前に跪いてまた暫く祈念を凝らしてゐた。和三郎は筆簞を函へ入れると、神前の瓶子を下げ、用意の土器を白木の三寶の煤けたのに載せ、二人の前へ持つて行つて、神酒を戴かした。大島の袷に金紗縮緬へ小松のしぼの入つた葛の三つ紋の羽織を、陽氣に比べて暑苦しさうに着流した大年増は、神酒を戴くと直ぐ献湯の釜の前へ來て、落ち散つてゐた笹の葉を拾ひ上げ、大事さうに櫻紙へ包んで懷中に納めながら、

「頭痛持ちですよつて、これを頂いといて、蟬谷へ貼りますと妙に癒りますんでござります。」と、和三郎を見てにっこりしつゝ言つた。

「そんなことを申しますな。お入用なら、何んぼでも持つておいでやす。」と、和三郎は神社の金紋の光る釜の上へ春榮の載せて置いた笹の枝を其のまゝ取つて、大年増の前へ差し出した。

「もうたんと頂きましたんだすけど、折角ですよつて、もう四五枚貫はかして頂きませう。」と、大年増は直垂姿の和三郎に寄り添ふて、笹の葉を四五枚捲り取り、また櫻紙へ柔かく包んで懷中に入れた。

左司馬爺さんと徳さんとは、二人の參詣人に黙禮して、忙しさうに和魂の方へ歸つて行つた。先刻から他の參詣人は一人も來ないで、境内に並んだ石燈籠の上へは、怖ろしい町中から暫し翼を休めに來た



らしい三四羽の雀が止まつて、黒い苔をつゝいてゐた。

結城お召の上へ鐵無地の單羽織を着て、綴れ織の帯へ白金の鎖を細く絡ました、濃い眉に眼の凜々しく苦み走つた四十男は、社務所へ行つて、春榮に何か言ひながら、神樂錢と献湯料とを紙に包んで納め、別に若干の心付けを春榮の白い手に握らせた。

やがて、男と女との連れ立つて表門から歸つて行くのを、和三郎は直垂を脱ぐのも忘れた風で伸べ首をしつゝ見送つてゐたが、ぼんやりとして、社務所へ入つて來ると、矢張り直垂のまゝで、錠豆の煙管を取り上げ、煙草は詰めずに、くるくると小器用に廻はしながら、

『年増もわるうないなア。あいだけの衣裳を着ると、……』と、嘆息する風に言つた。

『ぼんなら、年増の後追ひかけていたらえゝやろ。……遠慮は要らんし。』と、春榮は心持ち蒼ざめた顔に、凄く眼を光らしてツンとした。

『年増一人やと追ひかけて行くんやが、あの男が居よるので、あかんわい。』と、和三郎は調弄ひ氣味にやくくして言つた。

『わ、た、へをこんな身體にしといて、ようそんなことが言へたもんや。』と、春榮はふるくんと身を慄はして、兩の眼に涙を一杯溜めた。

『お前かてあの男に氣がありさうにしてたやないか。』と、和三郎はまた調弄ひ積りであらうが、顔だけは眞面目腐つて言つた。

『知らん。』と、春榮は手にしてゐた銀貨の紙包みを、カチンと敷居に投げ付け、兩手で顔を蔽ふて、裏

手の方へ駈けて行つた。

## 三

しく／＼泣いてゐる春榮の白衣の肩に手をかけて、和三郎は、祭禮の提燈立てなどを入れた物置の側で、稍暫く宥め賺してゐたが、春榮はビク／＼と身體を震はして、急に泣き止まなかつた。

『嘘や、嘘や。わい<sup>わ</sup>がわるかつた。あやまる。あやまる。』と、和三郎は四邊<sup>あち</sup>に氣を兼ねる風で、春榮の耳の側へ口を寄せつゝ、直垂の袖を翳して小聲に言つてゐた。

『あんたは薄情や。わた<sup>わ</sup>へを手遊品<sup>もちあそび</sup>にして、こんな身體<sup>からだ</sup>にしてしてもて、自分が甲斐性<sup>かひじやう</sup>なしやよつて、わたへを棄てて逃げようおもてる。そんな無茶なことさせへん。もう何もかも社司<sup>かみ</sup>さんに言ふてしても、どツちが悪いか、聽いて貰らう。』と、春榮は肩に纏<sup>まと</sup>はる和三郎の手を振り退けて、啜り泣きつゝ血を吐くやうな聲をした。

『今になつて、そんなことしたら、どんならんがな。……そやよつてわい<sup>わ</sup>が墮胎<sup>かた</sup>して丁<sup>しや</sup>ひて、あれほど言ふたやないか。能う考へて見い、早いほどえゝのや、今かてまだおそいことあれへん。……能う考へて見い。』と、和三郎はいよ／＼聲を密<sup>ひそ</sup>めて、三十八の中爺<sup>おぢ</sup>がこの十六の小娘<sup>こむすめ</sup>に泣き絶<sup>た</sup>るやうな風をした。

『そんな怖<sup>おそ</sup>いこと出<sup>で</sup>けえへん。……和<sup>わ</sup>アやんは鬼<sup>おに</sup>みたいな心<sup>こころ</sup>や。……坑<sup>くわ</sup>夫<sup>ふ</sup>をしてたち<sup>ち</sup>うよつて氣が荒<sup>あ</sup>いのや。……お母<sup>か</sup>んもさういふてる、そんな男<sup>おとこ</sup>に長いこと係<sup>か</sup>り合<sup>あ</sup>ふてると、仕舞<sup>し</sup>には殺<sup>ころ</sup>されるかも知れんて。……』

『お母<sup>か</sup>んに言<sup>い</sup>ふたのかいな。』と、和三郎は凄<sup>あは</sup>い眼<sup>まなこ</sup>付きをして、春榮の後腦<sup>かうなう</sup>部の邊<sup>へ</sup>を睨<sup>にら</sup>み詰<sup>め</sup>めたが、直<sup>ち</sup>ぐ

に氣味のわるい笑みを漏らして、

『子供やなア、お母んに言ふちうことがあるか。何んで隠しとかんのや、あれほど言ふたのに。……桑原はんや、氏子總代に知れて見い、二人とも此處に居られへんで。……何んぼ坑夫までして來たかて筆業七年の修業を積んだ、こいでも長袖の生れや。……時節を待つてとくれ、悪いようにはしえへんよつて。』と、急に猫撫で聲の慰め顔になつた。

『だん／＼お腹が膨れて來ると、何うしても此處に居られへん。』と、春榮は白粉の斑らな首を振つた。

『そやよつて、思ひ切つて、あれして了ひ言ふてるんやないか。そないに痛いことも術無いかもあれへんさうや。……わいの知つてる難波のお婆アはんに頼んだる。』と、和三郎は熱心に説きかけたけれど春榮はもう何も言はずに、身を悶へてゐるやうであつた。

折柄表門の敷石に下駄の音がしたので、和三郎は直垂姿を齧へして、社務所の方へ走つたが、參詣人は今時珍らしい丁髷に結ふた、胡麻鹽頭の老人で、鈴の緒を引いて一寸拜んだきり賽錢も入れずに西の横門から出て行つた。

直垂を脱いで、淺黄の袴に穿き更へた和三郎は、暫く社務所の窮屈な机の脇に坐つて、拜殿の前の石燈籠から、横側の瘦せた樹木などを眺め込んでゐた。此處の大きな工業や商業の都市は一個の有機體の如く、遠く近くからわアと唸るやうな生活の音響を立て、轟々と迫つて來るので、この猫の額ほどの社地は、本殿の千木や鯉木や、拜殿の破風をば、機械といふ人喰ひ鬼の火の車を廻はす石炭の煤に穢され、瘦せた神木をば塵埃に汚されて、今にも滅びて了ひさうに見えながら、危くも別に閑寂な小天地を作り

つゝ、古代の服装をした男女が、坐眠みねひりをしてゐても大事な場所になつてゐる。けれども其の坐眠みねひりの男女の古風な衣服の廣い袖にも、相應の情話や悲劇が包まれて、いづれは人間の住む浮世であることを思はしめる。

和三郎は春榮のことが氣にかゝるので、また藁草履を突ツかけて裏手の物置の前へ行つて見ると、春榮は物置に並んだ形ばかりの浴室で、朝沸かした淨めの風呂のまだ冷めてゐないのを幸ひ、透き通るやうな湯に、すべくと白い肌の乳房の上までを沈めて、ケロリとした顔で、ぢやぶくやつてゐた。白粉おしろいも涙も皆流し落されて、今鳴いた鳥からすが何處へ行つたといふ容子をしてゐた。白衣や緋の袴や湯もじなぞだらしく物置の家根の上に引ツかけてある。

『お加減は何うだす。』と、和三郎は笑ひ顔をして言つた。春榮は笑ひかけた顔を無理に引を締めつゝ耐へて、クルリと向ふをむき、頸筋のあたりまでを湯に沈めて、石膏像の如く動かなかつた。

『焚きまへうか、ぬるけれや。』と、和三郎が前へ廻はると、春榮はまたくるりと首を向け變へて、兩腋を窄めつゝ湯の中に縮かまつた。

『嫌ひに嫌はんかてえいやないか。』と、和三郎は執しじツこくまた前へ廻つた。

『嫌ひ。』男て、こんなとこへ來るもんやあれへん。』と、春榮は左の手を振つて、和三郎の兎うさぎのやうな圓い眼をした淺黒い顔に、湯の飛沫を引ツかけた。

『あッ。』と、仰山さうに顔を掌で押おさへて和三郎は、

『手水てみづかけてると、手てこないが生れるちうで。』何なにうやもう餘よッぽと大おほけなつたか。』四月よつげちうと

どれぐらゐや。』と、小聲で言ひく、顔を突き出して風呂の中を覗き込まうとした。

『嫌ひ。』と、春榮はまた手を振つて湯の飛沫で和三郎の顔から胸の邊りをしたゝかに濡らしたが、和三郎の男としては華奢な手が春榮の白い手の細い指を攫むと、何うした拍子か箆めてゐた銀の指輪がぬらりと抜けたので、和三郎はそれを手早く自分の小指に箆めて、また湯を引ツかけられない中に、物置の横まで逃げ退いた。

『返へしとう。』と、春榮は腮をあげつゝ風呂の中から幾度か言つた。

#### 四

アルミニウムてんばくの凸凹でこぼこになつた辨當箱を開いて、二人は社務所の小さい机を真中にお取り膳のやうにして喰べた。喰べてゐる中に丁ど午砲どが聞こえた。箸を上げ下ろしする和三郎の左ぎツちよの手に今しかたの銀の指輪の白く光るのが、小指だけに殊更目立つた。春榮はそれを見ても、別に何も言はなかつた。

『この春、あんたが此處へ口入屋に連れ來て貰うた時は、恥かしかつて辨當をよう喰はなんだなア。』と、和三郎は古い昔のことでも思ひ出すやうに、感慨の深い眼をして言つた。春榮は片膳を見せて、たゞ微笑んでゐた。比

『其のあしたからは、漸う此處で喰べ出したけど、隅の方を向いて悪いことでもするやうに、小ツこゝろなつて俯伏うつぶして喰べてた。それがこんな圖太ぶい女をんなになつたんやさかいなア。』と、和三郎は辨當の飯の一粒をも拾つて、綺麗に喰べ終つた。

「誰れが圖太うしたんや。」と、春榮も微笑みながら、和三郎の茶碗に口の缺けた土瓶の茶を注いでやつた。

二人とも喰へ終つた同じ大きさの辨當箱は、同じ海老茶色の毛糸で編んだ袋に入れられて、机の下に押し込まれた。春榮は襟元を少し開けて、其處にあつた神符を拵へる大版の美濃紙の一折で肌風に風を入れてゐた。

「今年は何んでこないに長う暑いんやろ。」と、和三郎も有り合はした中啓を開いて、粗末な紅色の模様をひらく／＼させて煽いでゐた。

「また喧嘩しやうか。」と、春榮は笑ひながら言つた。和三郎も笑つて、つく／＼と春榮の顔に見とれてゐた。

午後になつても參詣人は一人だつてなかつた。雲の一片さへ見せなかつた朝からの晴れた空は、午後になつて少しづつ、白雲を浮べて來た。南風が吹いて、時候は暑いながらも、雲の色は流石に秋であることを思はせた。何處の工場の烟突からともなく飛んで來る煤の粉は、風向きによつて、二人の白衣や、衣桁にかけた水干に、胡麻でも振つた如く散りかゝる。

「何んぞ欲しいなア。」と、煙草も吸ひ飽きた和三郎は、口淋しさうにして間食を望みつゝ、口を尖らしては頻りに自分と春榮との白衣にかゝる煤の粉を吹き飛ばした。

「あゝ忘れてた。」と、春榮は先刻電話を借りに行つた時買つた焼芋を、背後の雲脚臺の下から、黄色い汚點のある手巾に包んだまゝ取り出して、和三郎の前へ擴げ、二人とも稍暫し無言で、口をもぐ／＼動

かしてゐた。

『二銭がんやろ、もうちツと欲しいなア。……どれ一つ探して來う。』と、和三郎は一度襟へ差した爪楊枝をまた抜いて齒を穿りつゝ、拜殿へ行つたが、賽銭箱の後や圓座の下や、雲脚机、八足臺の横までも犬の這ふやうにして探し廻はつた末、拜殿を抜けて、本殿の階段を昂り、正面の扉の前から兩側の簀の子にまで廻はつて見た。

『三銭六厘あつた。……賽銭箱が出したるのに投げ銭する人があるんや。』と言つて、和三郎が拾ひ集めた五厘銅貨五つと一銭銅貨一つと、穴の明いた昔の一厘錢一つとを、大事さうに握つて來て、机の上へぢやらツと置いた時、春榮はさげしむ風の顔で和三郎を見詰めた。

『お宮はんちうもんは、このせ、ち辛い世の中でも、言はゞ金の生る木や。何んぞ欲しい時に探して來ると、二銭や三銭は屹と落ちてゐる。……今時五厘た一つかて只呉れるとこあれへん。……慾の深い奴が五厘た一つで、家内安全息災延命を買うて行きよるんやもん、考へて見ると、賽銭ほど安いもんはないなア。電車賃も安いが賽銭には敵はん。』と、和三郎が謹けた風をして、拾つて來た錢を幾度もく勘定するので、春榮もつい釣り込まれて笑ひながら、

『一厘錢もあつたのやなア。』と、自分たちよりはズツとく幾百年も前から浮世に現はれて來て、多くの人の手に荒い波風を漕り、世は全くの貨幣經濟となつても、まだ時代おくれの穴の明いた姿を、神社の賽銭箱などに晒してゐる、其の醜い狀をば、何も知らぬ乙女心のたゞ珍らしいものとして見てゐた。

『乞食でも今こんな錢貰ひよらん。』と、和三郎は其の一厘錢を摘んで、獨樂のやうにくるくると、机の

上で縦に廻はしてゐたが、やがて五厘、一錢の銅貨をも一つ／＼取り上げて年號を調べて見た。

『情ないなア。一厘錢を退けると、あとは皆わいより若い錢や。…この一錢だから明治十二年生れで一番古いが、そいでもわいより一つ下や。この五厘が明治十九年で、丁ど三十か。春さんは明治三十三年生れやなア、そらこの五厘と同じ年や。…錢はかうなつて見ると、十年や二十年違ふても見たど、とは同なしやなア、これ見いこの方が却つて黒うなつてよる。』と、和三郎は一つの五厘錢を春榮の前に投げ出した。春榮は自分と同年の小さな銅貨を取り上げて、今までまだこんなに丁寧に錢の姿を見ることがないと思ふほどに、ちツと眺め入つた。さうして自分の懷中から毛絲の小巾着を引き出し、入れてあつた眞新らしい一錢銅貨を摘んで、自分と同じ年の五厘銅貨と比べて見た。其の一錢には大正何年と時代違ひの年號が讀まれて、模様も違つてゐた。

銅貨を前に置いて、春榮は自分の年と和三郎の年とを、うら寂しく考へつゝ、何んとはなしに涙を催して來た。

『關東ださ買はうやないか今度は。…其の一錢も足して。』と、和三郎は一厘錢だけを机の上に殘して有らつたけの銅貨を握ると、急いで關東煮を買ひに、西の横門から出て行つた。

## 五

夜はそれでも餘程冷氣を催ふした。

『今夜また此處へ來とくれ。…嘘吐くんやないで。』

『屹と來る。嘘吐けへん。』



『ぼんまに來とくれ……今夜こそ相談を決めて了はんならんよつてなア。』などと、晝間關東煮を喰べながらの約束で、近所のルナパークに、花やかな電燈がバツと一時に點いてから間もなく、離れ小島のやうに寂しいこの拜殿の前へ、和三郎が先づ紺飛白の度々水を潜つたのに黒金巾の兵兒帶を腰でチョキソと結んで、白い鳥打帽を被り、竹の根節の細くしな／＼する洋杖を振りつゝ、南の門からやつて來た。暫くして、春榮も晝間穿いてゐた赤い鼻緒の雪駄の音を忍び／＼、瓦斯紡績の袷に赤の勝つたメリンス友禪の帶を行儀よく締めて、西の横門から入つて來た。四邊は森閑として、月の無い夜は、二人の影法師さへ映らなかつた。黒く並んだ石燈籠が人の姿のやうに見えて、蟋蟀の鳴くのが微かに聞こえた。『お園ぢやないか、……六三さんか。』と、和三郎はたまらぬほど下手な節で小さく唸つて、にこ／＼と春榮に近づいて來た。さうして二人は定つた軌道を進む星のやうに、すうツと無言のまゝ、和三郎を先きに春榮は斜めにそれと引き添ふて、拜殿の西側へ吞まれる如く入つて行つた。

何處となく塵埃臭くて、二人とも足袋を穿かぬ足元のざら／＼する中を、暗黒の手探りにもよく勝手を知つて、圓座を二つ座蒲團代りに持ち出し、祭典の折玉串案に使ふ小さな八足臺を真中に、餉臺みたゝにして向ひ合つた。

『これ痛うていかんなア。座蒲團が欲しい。』と、和三郎は足を撫でながら、胡座をかき直した。

『錢さへあつたら、宿屋へでも、ぼん屋へでも行けるがな。』と、春榮は蚊の鳴くやうな聲より出せなかつた。

『錢のこと言ふとくれな、水くさる。……氣が詰まるがな。』

『さうかて、そやないか。こんなとこで人が來えへんかあもて、心配しいく、灯も點さずに話してるのも厭やになつた。』

『わいの甲斐性無しが厭やになつたんやろ。……さうかそんならよい。』と、和三郎は屹となつた。

『そやないけど、こんなとこでこんなことしてると、神さんの罰當れへんかあもて、わたへ怖い。』と、春榮はあど／＼する風で言つた。

二人の眼はだん／＼暗黒に馴れて來て、互ひに顔だけは見合はせることが出来るやうになつた。

『嘘や。神さんは怖うないけど、わいの甲斐性無しが怖いのやろ。分つたるがな。そやろ、さうならさうと、はつきり言ふとくれ。こなひだも言ふた通り、何うあつてもわいの女房になるのは厭やか、何うや。』と、和三郎は疊みかける調子で言つた。聲も知らず／＼高くなるのに我れから氣が付いて、ハッと口を押へようとした。

『……あんまり年が違うよつてなア……て、お母んが言ふてはる。……』と、春榮は有るか無いか分らぬほどの聲を出した。

『……お母んが言ふてはる……んやないやろ。春さんがあもてはるんやろ。……そんならそれでよい。わいにも了簡がある。』と、和三郎はヂツと腕組みをした。

『……そやあれへん。』と、僅かに言つて、春榮はだん／＼俯伏いたが、また上は目を使つて窺と和三郎の様子を見ようとした。

『わいもなア、神樂師の家に生れて、一時は生野で坑夫までして來たけど、錢が無いのと臆病で、毎も

言ふてゐる通り今まで女に手を出したことがないのや。……正直な話は女はお前が初めや。……初めの終やろ。……年は、いっててもこれが後妻と言ふやなし、お前とわいが夫婦になつたかて、一寸も可笑しいことあれへん。……わい、かて何時まであんな一膳飯屋の二階に居やへんさかいなア、春さんよう考へて、わいんとこへ嫁とくれ。お前もそんな身體になつたんやもん。ぐづくしてると桑原はんや氏子に知れて、大騒動が起るといかん。今の中にお前さへ承知して呉れたら、お母んやお父つあんの方は、わい、がいて話するがな。』と噓んで含めるやうに言ふ和三郎のひそく聲を、春榮はたゞぼんやりと、そんなに切迫したこともないと言つた風で聽いてゐた。さうして、和三郎が書問社務所などでは『あゝ』といふのに、この拜殿で密會する時に限つて、『お前』といふのが際立つて耳に立つた。

『そんなら書問も言ふたやうに、墮胎して丁ひ。それが一ツちよい。……難波のお婆アはん上手やよつて、一寸も術無いことあれへん。樂なもんや。』と和三郎はまた手を變へて説き出したけれど、これには春榮が即座に首を振つた。

『そんならお前何うすらうんや。……わい、知らん顔してると薄情やて言ふやろ、それ見ると、マツさらいわいが嫌ひになつたんでもなさうやが、そんなら夫婦にならちうと厭やと言ふし、墮胎すのも承知せんし、土臺ごくお前の丁簡は解らん。……わいはそら甲斐性無しやろが、お前とこかて見、高が職人やないか、何んぼ容貌がよかつたかて、そないにえいとこへ嫁かれへんで、よう考へて見いや。』と、和三郎は男らしくもない泣き出しさうな物哀はれな聲になつて來た。

『貧乏かて構へん、……年のつろくした人と夫婦になりたい。……』と、春榮は書問なら耳朶まで蕪く

なつてゐるのが見えさうな、初めて男に口説かれた時と同じ風をして、聞こえるか聞こえないかの聲で言った。

『分つた。矢ッ張りわいが年としいてるさかい、厭いとやになつたんやな。もうえい。何んにも言はいでもえい。』と、急に恐ろしい劍幕で言つた途端に、和三郎の左ぎツちよの手が前の八足臺へ強く觸れて、先刻春榮から取つて小指に簪めてゐた銀の指輪がカチンと音を立てた。春榮はぎよツとしながら、晝間取られた指輪のことを思ひ出して、指輪の無くなつた自分の左の紅べにさし指ゆびを見た。

『そやけどなア、まア能よう考へて見い。』と、和三郎はまた言葉を柔かくして、八足臺の下へ膝を突ツ込みつゝ、春榮の膝の方へ摺り寄つた。

『今日けふ献湯けんとうに來た人見い、年は大分違ふてるが、能よう似合ふた夫婦めうとやないか。』

『あんなえ、服装ふくそうして歩けるんなら年が違ふてもえい。』

『そんなら、お前何まへうあつても、わいと今夫婦めうとになるん厭いとや、いふんやなア。』と、和三郎が最後の宣言をするやうに言ふと、春榮は、うんと直ぐ點頭うなづいた。

『墮胎たうたいすのも厭いとや、んやなア。』と、和三郎は續けさまに言つた。

春榮は、うんとまた點頭うなづいて見せた。

『二人ふたりで何處どこぞへ駈かけ落ちしやうか。ばんくするのは何どうや。』と、和三郎は一寸考へてから睨み付ける風をして言つた。

春榮は驚いた顔をしたが、首を振つて、いや、くくをした。

『そんなら、お前何うあつても、わいが厭やになつたんやなア。さうか。』と、和三郎は絶望の色を漲らせつゝ言つた。

春榮は、直ぐに強く首を振つて、さうではないといふことを熱心に確實に見せようとした。

『お前は子供やなア。』と、和三郎は投げ出した風で言つて、苦笑ひをした。春榮は何んとも言はず、兩手をキチンと膝の上に置いてゐた。

## 六

稍暫く、暗黒の中の沈黙が続いた。外の繪馬堂の脇あたりで、がさ／＼と物の音がしたので、二人は驚いて振り向いたが、門に扉はなくとも人の入つて來た様子はなかつた。おほかた犬であらうと二人はさう思つた。死におくれた蚊が何處からか、人間の匂ひを嗅ぎ付けて來て、耳の側でふんと唸つた。

『お前、ほんまに何うしたらえいといふんや。』今夜こそ何うあつてもそれ決めて了はんならん。：一體何うしたらえいのや。』と、和三郎はまたやり出した。

『こんなり、かうして居たいのや。』と、春榮は眼を細くして、可愛らしい口元をしながら、にっこりと和三郎の顔に見入つた。

『こんなりで居られるもんなら、誰れも心配しえへんがな。』お前も十六で、もう子供やないやないか。ちつと確乎しとくれ。これから半年ほどするとお母んになるんやで。』

『お母ん。』と呆れた顔をした春榮は力無さうに俯伏して、自分の腹部を赤い帯の上から見詰めた。『何うや、もう少しは動くか。』ビク／＼となア、動くちうこつちや。』知らんけど。』と、和三郎

はまた柔かな言葉つきになつて、首を突き出した。

『ちいと動きよる。』と、春榮は寂しさうな顔をして點頭うなづいた。

『それ見い、もう動くんやもん、來月再來月……とだん／＼お腹なかが大きなつて來るやないか。……ぐづ／＼して居られへん。ちツと確乎しつぷしいんかいな。』と、和三郎は勵はげます調子で力強く言つた。

『わたへ、ほんまに子を生まんならんやなア。……何うしたらえ／＼やろ。』と、春榮は今更らしく涙ぐんで、腹の方ばかり見詰めてゐた。

『一所になると子が出るのが當り前やないか。……何んにも心配することあれへん、わいわいが附ついてるがな。』と、和三郎は慰め顔に一層優しく言つた。

『お父ちちつあんやお母かんに知れたら、わたへ何どないに言ふたらえ／＼やろ。』と、春榮は俄に恥かしさうな風をして、袖口を口元に押し當てた。

『何言なにふてるんや、お前まへお母かんに打ち明けたといふてたやないか、先刻さつぎに、二遍も。……』と、和三郎は不思議さうに眉を擡めた。

『あれは嘘うそや。』

『嘘か。たよらないなアお前の言ふてことは。……ほんまに確乎しつぷしとくれ、二人の一生の身の上に係るこつちやないか。お前一體何んとおもつてるんや。』と、和三郎は焦いらく々した風で立ち上つたが、何をするともなく暗黒の拜殿をぐる／＼廻はると、場所が場所だけに、今更の如く自分の罪が怖ろしく思はれ今にも何處からか、『不義者見付けた、其處動くな』とでも大喝されさうな氣がして來て、立つても居ゐて

も、おたゝまらぬやうになつた。

暗を透かして本殿の方を仰ぐと、閉された扉は大きな海老錠とゝもに、しつとりと夜露に濡ふたらしく、扉の上に懸つた神鏡は星の影を映して、夜目に微かながらも、神居ますが如く拜まれた。

『もう去なうか。』と、春榮は大きな欠伸をしたが、和三郎が何んとも言はぬので、また八足臺に凭れて座睡でも始める風であつた。

『あつ、こんなものを出しといて、春さんが納すのを忘れたんやなア。』と、和三郎は稍大きな聲で言つて、足音を忍び／＼、晝間春榮が劍の舞に用ゐた白鞘の短い太刀を雲脚臺の上から取りあげ、

『危ないなア。』と、獨り言をして、右の手に太刀を握つたまゝ春榮の側に寄つて來た。春榮は一寸それを見上げたが、氣にも留めぬ様子でまた俯伏いて了つた。

『もう去なう。』と、春榮はまた言つて、圓座の下へ座り直した。

『あつ、何んや踏んだ、氣味が悪い。』と、和三郎は太刀を持つたまゝで、瓜先き立てつゝ春榮の前へ廻はつた。

『わたへの糠袋や。』と春榮は笑ひ／＼、和三郎の足元から糠袋を片寄せ、脇に置いた小さな金盃や石鹼と一所にした。

『何んやお前、そんなもん持つて來てたんか。』

『今夜は縫ひ物屋が休みやよつて、風呂へ行く言はな家出られへん。』と、春榮はまた大きな欠伸をした。

『お前はそれで、眞ん氣になつてるのかいな。』と、和三郎は太刀を持ち直して詰め寄つた。

『眞ん氣も嘘氣もあれへんがな。……もう去なう。』と、立ち上りかけた。

『……春さん、寧そ一思ひにわいと心中してんか。……頼む。』と、和三郎は身體を押し付けるやうにして、春榮の立つのを引き留めた。

『心中。……阿呆らしいこと言ひなはるな。……芝居みたいなこと、阿呆らしい。……』  
『何んで阿呆らしいのや。』

『阿呆らしいやないか。芝居やあろまいし。……三十八にもなつた人と心中したら、損が行く。……わたへが三十八になるのには、……』と、春榮は指折り數へて、

『まだ二十年からあるがな。』と、冷やかすやうな調子で言つた。和三郎は顔色を變へたらしく、目付きも凄くなつたが、暫くしてから、

『そんならなア春さん、心中の眞似だけしとくれ。そいで、わいも氣が濟むよつて、何うや出けんか。』と打つて變つた物優さしい聲をした。

『心中の眞似て、何んなことするんやろ、可笑しいな。』

『わいがこの刀抜いて、かうやつて、南無阿彌陀佛ちうて、腹切る眞似するよつてな。お前も兩手を合はして、南無阿彌陀佛ちうて、咽喉突く眞似するんや。』と、和三郎は鞘のまゝの太刀で、切腹する形や咽喉を突く風をして見せた。

『厭や、そんなこと、ほんまに芝居みたいなこと。……和アやんとわたへと心中したらお半長右衛門やなア。』と、春榮はくすく笑つた。



『まあえいさかい一寸してみい、かうやつて兩手を合はして、南無阿彌陀佛といふて見い。一寸でえいのや、頼む。』

『かうするのん、…可笑しいな。』と、春榮は男の促すまゝに、少し仰向いて、白い咽喉を和三郎の眞正面に見せ、兩眼を閉ぢて、

『こいでえいのんか。』と、可笑しさを耐へる風で言つた。

『うん、そいでえいのや。まあちいとさうして見い。えい恰好や。するとわいがかうやつて。』と、和三郎は左ぎツちよで、太刀をすらりと抜き、春榮の咽喉に當てる眞似をしたが、我れながら冷りとして白刃を引ッ込ませた。

『げんがわるい、もう置かうやないか。』と、春榮は眼を閉ぢたなりで言つた。其の柔かさうな、ふくふくとした腮から咽喉、些かはだけた胸元を見ると、和三郎はふらくと夢中になつて、いきなり右の手を春榮の胸に突ッ込み、堅く襟元を攫んだ。…遠くで三味線の音がするやうであつた。

『嫌ひ、こそばい。(襟ぐつたいといふ事)何するのん。』と、春榮は戯れだと思つてゐるらしかつたが、ふらくして正氣を失つた和三郎は、白刃を取り直し、春榮の眞白い咽喉を狙つて、ぐさとはかりに突き刺さうとした。

『あ、ア怖い。お母ん。…』と、春榮は叫んだ。この瞬間に眼を開いて危険の身に迫つてゐることを知つた彼女は、魂ざる聲で母を呼んで、身を遁れようとするらしかつたが、そんな餘裕はなくて、白刃は忽ちふくよかな咽喉に突き立てられた。

『ぎゆう。……』と鳴るやうな音と、もに、生暖かい、ぬら／＼したものが和三郎の左の手に注ぎかゝつた。

春榮はもう物も言はなければ、動きもしなかつた。彼女は自分が毎日手馴れて、舞に使つてゐるのでこの白刃をば、最後の瞬間まで恐ろしい兇器とは思ひ得なかつたのであらう。

和三郎は、かうなるともう案外の落ちつきが出来て、其の白刃と、もに、春榮のまだ暖かい死骸をば神饌用具を入れる戸棚の中に押し隠し、流石に劇しく動悸のする自分の身體は、慄ふ兩足を踏み締め／＼運び出すやうにして、拜殿の外に下り立つた。……下駄は間違へずに、自分のを穿いた。

## 七

西の横門を出た和三郎は、通りを北へ北へと急ぎ足に歩いた。向ふから來る人々が皆自分の顔を見詰めて行くやうな氣がするので、成るだけ暗い軒下を選つて歩いた。

自分は春榮を殺したのだなアとは思ふけれど、何故殺したのだらうとは考へもしなかつた。……何うしやうと思つてゐるのか、今一度春榮に念を押してみたいと考へては、さうだも春榮は此の世に居ないのだと氣が付いて、ハツと悪い夢から覺めた如く、我れに返へつた。けれどもまた直ぐに、春榮とはまだ何時でも話が出来るやうな氣がして、其の死骸が、自分の毎日筆箒を吹いた拜殿で押入れの中にだん／＼冷たくなつて行くとは、何うしても思はれなかつた。

しかしまた自分はもう大びらに世の中を歩ける身體ではない。つい先刻までは交番の前でも何の憚るところなく歩いたのが、今は巡查に逢ふと直ぐ立ち竦んで了ふであらうとは、明かに意識してゐた。あ

ゝア情けないことをして退けたとも思つた。

幸ひに交番の前へも出ず、巡査にも行き逢はずに、夜の花の一時に咲いた如く賑やかな道頓堀へ出ると、自分はこんな晴れがましいところに居られる身體ではない。世間が頓に狭くなつた自分には、ぞろぞろと行くこの多くの人たちが、皆探偵ではないかとまで考へられて、眞晝の如く明るい電燈の下は、眩しく怖ろしくて、和三郎の足は自然に暗い方へと運ばれた。

いろ／＼の食物が電燈に映つて美しく見えるので、平生ならば口にいつばい唾液の溜るところを、今夜はそれらの店頭を、胸がむか／＼するやうな思ひで通り過ぎた。自分では暗い方へ暗い方へと志してゐる積りであるのに、足は矢ッ張り明るい方を辿つた。これが一切夢で、ハツと眼が覺めると、一膳飯屋の二階に寐てゐて、下の狭い往來を通る車の響を耳にしながら起き出で、窮屈な流し元で手水を使ひ、店の一膳飯を喰べて、筆簾の函を片手に、春榮の顔を見るのを何よりの樂みとして、神社へ出勤するのであつたならば、などと、今朝までの自分の平和を頻りに懐かしがつてもみた。

子供の折、父に頭を擲られつゝ、筆簾を教へ込まれたことも思ひ出された。疴性病みの母が障子の破れを氣にして、小さな穴でも直ぐ貼りかへてゐたことや、酉年の梅干を喰べると出世すると母は言つて、十年前の梅干をば小さな壺に入れて大事にしてゐたことや、其の母は自分が十二の年に死んで、それから母は繼母に三人までかゝつたことや、北の大きな神社で先祖代々神樂師をして來た筆簾の家を脱け出し、生野の銀山の飯場へ流れ着いて、長いこと暗い／＼坑夫の働きをしたことや、そんな自分の過去のことどもが、芝居の繪看板のやうになつて、眼の前に現はれて來ると思はれた。

何時しか、花やかに賑やかな芝居の前に立つてゐた。繪看板が美しく花電燈の光を受けて、人氣役者の改名披露の興行に、内も外もいつばいに景氣立つてゐた。肥後米や魚の蒸籠の積物が高く家根よりも上に聳え立ち、數限りもない旗幟は、ひら／＼と夜風に舞ふてゐた。群集に揉まれ／＼、仰向いて繪看板に見とれてゐる小娘の中に、春榮ではないかと思はれるのが居たので、またもやハツとしながら、あゝ春榮はもう此の世に居ぬのぢやと、頭から何か浴びせられたやうな氣持ちになつた。

左の小指を見ると、つい今日の午前まで春榮の篋めてゐた銀の指輪が、懐かしい手摺れに磨かれて、白く光つてゐる。和三郎は窃とそれを抜き取り、程近い橋の上まで行つて、恐る／＼風で後前を見い／＼自分が入水するやうな心になつて、其の指輪を道頓堀川に投げ込んだ。欄干から首差し伸べて窺いて見ると、河の水は黒く流れて、波紋も見えずに、懐かしの指輪は吞まれて了つた。この河の底に、自分の死んだ後々までも、指輪は泥に塗れてゐるであらうと、和三郎は往來の人にちど／＼しながら、急には立ち去り兼ねた。

また芝居の前へ出て、それから少し行くと、暗い横町が見付かつたので、南へ南へと急ぎ足に歩いた。圓い軒燈の怪しく光つた家から、婀娜かしい聲で呼び立てられたのも、耳へは入らなかつた。

行き行くと、小高い堤があつたので、それへ這ひ登つた。何時しか町は盡きて、郊外の畑の中へ出てゐたのである。振り返へると、大きな市街の空は一面に赤く染まつて、夥しい人いさが天へも届きさうに思はれた。近まはりの家々からは、燈火の私語が漏れさうであつた。

考へて見ると、春榮の死骸の横はつてゐる神社の横を通らなければ、此處へは來られぬらしいのであ

るが、今までそれと氣が付かなかつた。

星影に透かすと、自分の這ひ登つた堤は鐵道の線路であつた。冷たい四條の鐵が長くく帯の如くに引いてゐるのを、つい知らずにゐたのである。和三郎の心は矢張り亂れに亂れてゐる。

『この上に何時までもかうしてゐたら、今に火の車が迎ひに来て、十萬億土へ連れて行くであらう。』と、彼れは思つて、線路の上へ腹這ひになつたけれど、稍暫くすると、轟と雷のやうな響が遠くから聞こえて來たので、怖ろしくなつて、俄かに堤を滑り下りた。

明るい電車が疎らに客を載せて馳せ去るのを見送りながら、和三郎は堤の下にしよんぼりと佇んでゐた。

『あの電車に乗つたかて、行く先きは知れたもんやが、下敷きに轢かれたら、遠いところへ行かれるのやなア。』とも彼れは思つて、また堤へ這ひ登つた。(完)